

のような視座を、まったく気にしないで仕事をするのが良いか、あるいは、たまには気にした方が良いかは、研究・調査しようとする人の個性によって異なるだろう。

読者諸氏の研究・調査の発展を期待しながら筆をおくとしたい。

論 壇

日本短波放送の高層気象通報開始に思う

丸 山 健 人*

去る6月1日から、日本短波放送(〒106東京・港区赤坂)が「夏山気象」の時間を開設した。しかし、注目すべき点は、午前5時55分から5分間のこの番組が、実は前日21時の700ミリバールの高層実況データなのである。イルクーツクから札幌まで、ソ連、中国、朝鮮、日本にわたる20地点の風向(16方位)、風速(5メートルきざみ)、高度(メートル単位)および気温(0.2度きざみ=通報式どおり)の実況と、高低気圧の中心、気圧の谷峰主な等高線、高低温域の中心、主な等温線の位置を放送する。モールスやファックスでなく、音声の放送で高層データを一般向きに放送するのは、初めてのことであり、世界にも例がないであろう。

「夏山気象」という標題は、山の天気の実況や予報を連想させるが、そうではなくて、700ミリバールの高層実況であることの意義は大きい。実は、日本短波放送は、1976年3月まで、日本上空の高層実況だけ、もっと簡単な形で放送していたのである。ところが、放送開始時刻をくり下げる、あるいは、語学番組にきり変える、などの理由で、早朝および深夜に行っていた気象通報を同年4月中止したのである。この番組を愛用していた登山者などから強い復活要求が起こったが、中止の直後に山の遭難事故が相次いだこともあって、国会でも取り上げられた。そして、山岳団体等のねばり強い要求の末、今度の復活となったのであるが、それは単なる復活ではなく、内容をいっそう充実させ、極東域の700ミリバール等圧面図が概略描ける内容のものとなった。

ちょっと考えると、高層気象データより、山の天気をずばり言った方が役立つように思われるかもしれない。もちろん、実況が十分きめ細かく把握され、予報も精度よく行なわれるなら、その方がよい。しかし、実際はそうではない。既設の山岳気象測候所はほとんどなく、ま

た、観測点の天気だけではきわめて不十分である。さらに予報となれば、いっそう不確かなものとなる。だから、すべての登山者が観測員であり、自らの所の実況を高層気象の大きな場のなかでつかみ、予測を行なう立場こそ、もっとも効果的といえよう。しかし、これは山の気象だけの問題だろうか。近ごろ「最終製品型プロダクト」というのが流行し、コンピュータの力で、雨とか雲とか天気と直結する量にまで数値予報の結果をもっていけば、予報官や気象技術者の省力化が図れるかのように考えがちである。そのような試みは試みとして追求されていくとしても、地上および高層実況図を注意深く見る努力は省力できないように思う。

日本短波放送の高層気象通報の開始は、今年の気象記念日(6月1日)にふさわしい事業であった。夏山だけでなく年間を通じて行なってほしいと思う。この放送維持が大変なことは確かである。他の番組のように都合のよい時間に録音しておくわけにはいかない。専門解説者の早朝勤務が必要である。

しかし、私はもう一つ提言がある。それは放送とならぶもう一つのマスコミの手段、新聞に高層天気図を掲載することである。これは、21時のものは朝刊に間にあわないので09時のものになり、速報性は放送にかなわないが、切り抜いて連続的にみることができる。登山者だけでなく、もっと広い利用が期待でき、また学校教育の教材にもなる。高層データの普及は、気象教育の発展の道を実にきりひらく。地上天気図にとじ込められていた気象教育に高層天気図を開放しよう。高層天気図は、はるかに単純で原理的である。その意味で、新聞天気図の方は、700ミリバールよりも500ミリバール等圧面図の方が適当であろう。

最後に、この小文をまとめるにあたり、気象研究所予報研究部の飯田睦治郎氏から貴重な御意見をいただいたことを付記し謝辞とする。

* T. Maruyama, 気象研究所